

1970年代以降の日本社会（4）

— Zygmunt Bauman の Liquid Modernity 論 —

西脇和彦

1. はじめに

現代社会学では1970年代以降の日本社会を、後期近代あるいはリキッド・モダニティ (liquid modernity) とみなす。急激にグローバル化や多様化が進展したことから、それまでの価値基準や行動規範が揺らぎ、絶対的あるいは普遍的な基準を求めることがむずかしくなった。絶えざる流動性が特徴であり、砂浜に立てた杭のように、当初一時的には安定しているように見えても、意外に早く傾斜し、あるいは流されてしまう。環境が液状化しているところから、リキッドと形容される。筆者は、1945年以降70年代以前の日本の産業化社会を戦後近代化の第1ステージとみなし、それ以降現在の時代の時代を第2ステージと位置づけている。ポストモダニズムが近代の超克を標榜するのに対して、第2ステージが近代化を基軸とし、第1ステージの延長上に存在しつつも、量から質への転化あるいは変容をその特徴としていると考えている。この第2ステージの解釈を深めることを目的とし、私見を交じえつつ、社会学者の諸説を吟味、検討、援用し、これまで拙著「1970年代以降の日本社会（1～3）」（『学苑』昭和女子大学近代文化研究所，No. 829, 865, 881, 2009～2014年）において説明を試みてきた。

本稿では、現代社会学における近代の第2ステージの代表論者であり、リキッド・モダニティの提唱者でもある Zygmunt Bauman (1925-2017) の諸論を検討する。Bauman は、変動する社会に対応する「連続する自己形成」、いわゆる生涯教育の必要性を説いている。ここでは、彼の主たる言説を、マイクロサイドから高次の社会レベルへとシフトさせて確認するが、先ず導入として彼の *44 Letters from the Liquid Modern World* (Polity Press, 2010, 酒井邦秀訳『リキッド・モダニティを読みとく 液状化した現代世界からの44通の手紙』ちくま学芸文庫, 2014年) を概観する。本書には、流動的で多元化した現代社会に生きる私たちの生き方、スタンスが端的にまとめられている。

従来、アイデンティティはその達成（完成）が想定されていたが、それは安定社会を前提としたケースであり、絶えざる自己革新が不可避となった現在、もはやアイデンティティに達成はなく、形成のプロセスが連綿とつづくのみである。それは人間に限らず、集団や組織にとっても同様である。脱皮に失敗した例が反面教師として、ことの重大性を教えてくれる。彼は第4章「オフライン、オンライン」において次のように述べる。

ご先祖たちは「確たる自己」を持つべく腐心したが、いまや「常に変わる自己」を持つことに取って代わられつつある。自己は「使い捨て」できなければならぬ一不満足な自己、あるいは十分に満足できない自己、あるいはまた歳による衰えを見せる自己はあっさり捨てられなければならない。（酒井訳, p. 30）

そしてこのプロセスが半永久的に継続するとき、絶えず異なる自己が開示される。あるいは商品の突然変異に驚くこともあるだろう。日本においては、実際に、フィルム技術が美肌用の化粧品に応用され、寒天が凝固剤や口紅に変容する事例もある。そういった変革には抵抗がつきまとうが、次世代を担う私たちは勇気をふるってアナクロニズムと決別し、新時代に適合した変容を模索しなければならない。激動の時代には、これが存続への必要条件である。他者との差異化を恐れてはならず、むしろ、その差異が付加価値という武器にさえなる。したがって、Bauman はこれまでの常識を疑い、それからの解放を重視する。すなわち、先入主から自由になること、解放されることで、これが次の時代への第一歩となり、breakthrough (突破) を導き出す発端となる。

成功の秘訣は「自分自身であること」そして「ほかのみんなと違うこと」である。同じことではなく、違うことこそもっとも売れる点なのだ。もはや「仕事に必要な」知識と技を持っているだけではだめで、そんなものはいままでその仕事をしてきた人や、いましている人がすでに持っており、それだけではおそらく評価も扱いもマイナスとされる。その代わりに必要なのは「あらゆるものと似ても似つかぬ」非常識な考えであり、だれもこれまでに提案したことがない例外的なプロジェクトであり、なにかずくまるで猫さながらにひとり我が道を往くことである。(酒井訳, p. 147)

次節からは、この視座を前提に方法的個人主義に沿って検討する。すなわち、マイクロサイドからマクロサイドに向けて、彼の4著書からそのポイントを確認していく。(これらの邦訳書は刊行されているが、対訳部は全て西脇による意識とする。)

2. *The Individualized Society* (Polity Press, 2001) から

従来の社会学では自己形成においてモデルの存在は不可欠であり、そのモデルに自己を近づける形成プロセスを同一化の過程と見てきた。しかし現代では獲得した自己はその後、継続的に自己同一化の過程を繰り返すこととなるのであるが、複数のモデルが存在する場合、あるいは、モデルが次々に交代する場合、自己形成はどのようになるのであろうか。同一性の達成ができず、それを自己の拡散とみなして病理と扱い、マイナス評価してよいのであろうか。変動期に違和感やズレはつきものである。このプロセスは換言すると、同多化(「同一化」の対概念)となり、統合失調的とみなされるが、これを逸脱あるいは病理と解釈することには今後慎重であるべきである。E. H. Erikson のアイデンティティ論を批判的に継承した R. J. Lifton が変幻自在の Proteus 型人間を提唱したように、Bauman はさらにその先を見据えたと考えられる。彼からすれば、Erikson の自我論は、まさに第1ステージにおける ソリッド (solid) 型の人間論にほかならなかった。

Bauman は Erikson について次のように述べる。

Either Erikson's opinion has aged, as opinions usually do, or the 'identity crisis' has become today more than a rare condition of mental patients or a passing condition of adolescence: that 'sameness' and 'continuity' are feelings seldom experienced nowadays either by the young or by adults. Furthermore, they are no longer coveted — and if desired, the dream is as a rule contaminated with sinister premonitions and fears. (p. 148)

エリクソンの考え方は、他の考え方も一般的にそうであるが、旧式になってしまった。「アイデンティティ・クライシス」にしても、今日、精神病患者のまれな症状や青年期の一時的状態を凌ぐものとなってしまった。「同一性」や「連続性」という自己同一性の感覚を、今日では若者でも大人でもめったに経験することがなくなり、むしろ、それらの感覚を希求することさえなくなっている。仮に望んだとしても、その夢は不吉な予兆や不安に苛まれることになる。

そこで、彼は確定的なアイデンティティ (identity) に代え、その形成プロセスを重視するアイデンティフィケーション (identification) を援用し提唱する。これは、多元性に対応する同多化のプロセスを含むと考えられ、終わりなき自己形成を意味する。しかし、これこそがグローバル化・多様化の時代に適合した自己形成のあり方であると彼は考える。

そして彼は次のようにも述べる。

Perhaps instead of talking about identities, inherited or acquired, it would be more in keeping with the realities of the globalizing world to speak of *identification*, a never-ending, always incomplete, unfinished and open-ended activity in which we all, by necessity or by choice, are engaged. There is little chance that the tensions, confrontations and conflicts which that activity generates will subside. The frantic search for identity is not a residue of preglobalization times which are not yet fully extirpated but bound to become extinct as the globalization progresses; it is, on the contrary, the side-effect and by-product of the combination of globalizing and individualizing pressures and the tensions they spawn. The identification wars are neither contrary to nor stand in the way of the globalizing tendency: they are a legitimate offspring and natural companion of globalization and, far from arresting it, lubricate its wheels. (p.152)

継承したものであれ獲得されたものであれ、アイデンティティについて語るのではなく、アイデンティフィケーションについて語ることが、やむなくであれ好んでであれ、私たちすべてが関わっている、終わりがなく常に未完で答えも出ないような活動、すなわち、グローバル化が進行する世界のリアリティには適っている。そうした活動がもたらす緊張、対立、矛盾が収束する気配はほとんどない。アイデンティティ熱望の探求は、いまだ十分には一掃されていないが、グローバル化の進展につれ消滅していくような前グローバル化時代の遺物なのではない。そうではなくて、グローバル化と個人化の圧力のつながりやそれらが引き起こした緊張感の副作用や副産物である。アイデンティフィケーションに関連する闘争は、グローバル化の傾向に対立するものでも、それに抵抗するものでもない。それらは、グローバリゼーションの嫡出子であり、ごく自然な仲間でもある。そして、グローバル化を引き留めるのではなく、潤滑油とさえなる。

最終的な結論の見えない、常に暫定的で永続的な自己形成は、必然的に、個々人に多大な緊張感や不安感をもたらす。しかし、私たちは、それらに耐えつづけなければならない。時には一部の「私的領域」が他の「私的領域」や「公的領域」を侵食する。しかし、極端な「私的領域」は孤立し、排除または淘汰される。試行錯誤をつづける果てには、多様性を網羅する視座が誕生するかもしれない。これまでの歴史がそれを証明している。まずは、ますます高度化するグローバル社会と真摯に向き合い、挑戦していかなければならない。ミクロ的にはここから始まるということになる。ここにあるのは、病理的見地ではなく、産みの苦しみの見地からのスタートである。

彼は本書の末尾を次のように締めくくる。

I repeat: we have not been here before. It remains to be seen what 'being here' is like and what its lasting consequences (sorry for using outmoded terms) will be. (p. 250)

繰り返す: 私たちは以前からここにいるのではない。「ここにいる」ということが、(流行遅れの用語を使って恐縮であるが) どのような帰結をもたらすことになるのかを見つづけなければならない。

3. *Liquid Life* (Polity Press, 2005) から

変化の激しい現代社会では、長期的あるいは全体的見通しをもつことはかなりむずかしく、その場その場を乗り切る、これを積み重ねていくことが賢明ではないだろうか。しかもそこでは、矛盾・摩擦・対立・衝突が生じることも覚悟のうえで、それでも前進するためには、それらを止揚する忍耐力が要求される。昨今登場するコラボ型やハイブリッド型は、その解決策の一つではある。しかし、賞味期限付きの、あくまで一時的な対応策であることに留意しなければならない。いずれは次の対応策に迫られる。スピーディーかつ柔軟に、この繰り返しをしなければ存続がむずかしい。筆者は、第2ステージの特徴が、この暫定性の繰り返しにあると考えている。前節につづきマイクロからメゾのレベルにおいて、このプロセスはどのように理解されているのか。先ずこの前提には、多様性と特徴づけられる異質性の集合状態が存在している。

— liquid modernity sets itself no objective and draws no finishing line; more precisely, it assigns the quality of permanence solely to the state of transience. Time *flows* — it no longer 'marches on'. There is change, always change, ever new change, but no destination, no finishing point, and no anticipation of a mission accomplished. Each lived-through moment is pregnant with a new beginning *and* the end. (p. 66)

リキッド・モダニティでは目標を設定できないし、最終ラインを引くこともできない。より正確に言えば、リキッド・モダニティでは、一時的な状態が永遠につづくだけである。時は流れるが — 何かに向かって「行進」するのではない。変化、常に変化、そしてまた新たな変化で、いかなる最終目標も、最終地点も、そのミッションも完遂される見込みはない。物事を切り抜けたその瞬間は、新しい物事の発端及びその終焉も包含している。

このように螺旋的循環運動がつづくのみで、結論的には悲観でも楽観でもない。強いていうならば、そのプロセスにおいて、一時性の反復に対する忍耐力が必要なだけである。村落型の予定調和論はもはや過去の遺物と化し、都市型の前提不一致論を強く意識することが必要となる。相手との関係において、どこまで譲歩し、どこまで歩み寄れるか。その処理能力がカギとなる。その際、処理能力の柱をなす自己相対化が、その成否を決定する。換言すると、コミュニケーションも当初から成立するのではなく、ディスコミュニケーションを経ての成立となる。お互いのズレを認知することからスタートし、ズレの修整を経て真のコミュニケーションに到達する。いち早くズレに気づき、その修整をはかる処理能力が要請される。これこそがコミュニケーション能力で、現代人に必要不可欠な能力といえる。

その実践の場となる異質性が交錯する都市を、Bauman は次のように述べる。

From the beginning, cities have been places where strangers live together in close proximity to each other while remaining strangers. The company of strangers is always frightening (though not always feared) since it is part of the nature of strangers, as distinct from the nature of both friends and enemies, that their intentions, ways of thinking and responses to shared situations are unknown or not well enough known to calculate the probabilities of their conduct. A gathering of strangers is a site of endemic and incurable *unpredictability*. You could put it another way: strangers embody *risk*. There is no risk without at least a residual fear of harm or defeat, but without risk there is no chance of gain or triumph either; for that reason, risk-fraught settings cannot but be perceived as sites of intrinsic ambiguity, which in turn cannot but evoke ambivalent attitudes and responses. (pp. 76-77)

都市は当初から、異邦人がお互いに異邦人のままで、ごく近接して生活してきた場所である。異邦人の集まりにはいつもドキッとさせられる（常に恐怖心をもつほどではないが）。それが、異邦人の性向であって、友人や敵のそれとも異なる。彼らのねらい、思考様式、同じ状況への反応も未知である。彼らの行動を予測することも十分にはできない。異邦人の集まりは、固有で改変できない予測不可能性が渦巻く場所といえる。換言すると、異邦人はリスクを包含している。損害を受けたり失敗したりする恐れが、少なくともリスクは伴うが、そうかといって、リスクがなければ収穫も勝利もない。したがって、リスクを包含した場面は、本質的に多義的以外の何物でもなく、矛盾した態度や反応を引き起こすことさえあるのだ。

多様な人々から構成される都市は、また消費社会を顕著に反映する。人間、もの、組織、出来事、すべてにおいて有為転変が生じ、永続性、不変性、共通性を維持することはむずかしい。したがって、自己同一性が自己同多化となることも、地域のつながりが弱体化することも、パーソナル化が進行することも、これらは少しも不思議でも矛盾することでもなく、論理的に必然といえる。許容できるか否か、その温度差はあるにしても、本来予測されることであった。しかし、これらは相互に連動もしている。それだけに、きっかけさえあれば、暫定的につながる、あるいは協同する、時には連帯することも、また可能なはずといえる。現代社会では、仲間内でつながるだけでは不十分であり、むしろ、敵対する、あるいは、矛盾する勢力との協同も時には必要となる。この学習を積むことでしか、予測不可能性やリスクを減少させることはできない。すなわち、フィードバック能力がこの成否を決定する。常套句ではあるが、ビジネスにおけるコラボレーション、教育におけるアクティブ・ラーニング、これらもフィードバック能力の向上につながる好事例といえる。これらの根本にある第2ステージの自己形成スキームについて、Bauman は次のように結論づける。

More to the point, in the liquid modern setting education and learning, to be of any use, must be continuous and indeed life-long. No other kind of education and/or learning is conceivable; the 'formation' of selves or personalities is unthinkable in any fashion other than that of an ongoing and perpetually unfinished re-formation. (p. 118)

重要なことは、リキッド・モダンにおいて、教育や学習が効力を持つとすれば、それは継続的で、実際に生涯にわたるものでなければならない。その他のいかなる教育や学習も想像することができない。自己やパースナリティの「形成」は、永続的で終わりのない再構築以外には考えられない。

We feel, guess, suspect what needs to be done. But we cannot know the shape and form it will eventually take. We can be pretty sure, though, that the shape will not familiar. It will be different from everything we've got used to. (p.153)

私たちは、何かをする必要があると薄々感じ、漠然と考えている。しかし、それが最終的にどのようなものかは見当がつかない。確信できることといえば、ただ、それが得体のしれないものというしかない。それは、私たちがこれまで馴れ親しんできたいかなるものとも異なるものであろう。

4. *Liquid Modernity* (Polity Press, 2000) から

本節では、前節までのマイクロ中心の視座から、その外側にある社会に向けた視座へとシフト・チェンジしていく。現在進行形の社会現象、例えば、結婚の諸形態、雇用の流動化、難民の規模増大化のように、これまでの常識、基準では理解しきれない現象が多々生じるようになった。必然的にタームの修整、再定義化が要請される。筆者は、量的変化が質的変容に転化していると考え。様式の推移といえるかもしれない。したがって、違和感を残しながらも、まだ再定義にはいたらない、臨死的ゾンビタームが増加する。流動的社会では、そのズレの認知とその処理を繰り返す、厳しい作業が要請される。その作業は暫定的にしても成功に導くものでなければならない。そこには不安感や緊張感、不透明感がつきまとう。Bauman はそれを終わりなき「椅子取りゲーム」にたとえる。私たちは、その競争にいやでも巻き込まれてしまう。当初から不参加を表明することもむずかしい。この競争は、私たちの周辺で半永久的に継続する。彼はこう述べている。

No 'beds' are furnished for 're-embedding', and such beds as might be postulated and pursued prove fragile and often vanish before the work of 're-embedding' is complete. There are rather 'musical chairs' of various sizes and styles as well as of changing numbers and positions, which prompt men and women to be constantly on the move and promise no 'fulfilment', no rest and no satisfaction of 'arriving', of reaching the final destination, where one can disarm, relax and stop worrying. (pp.33-34)

いかなる安住の地も用意されていない。そのような地は、所詮追い求めたところで、その作業が完結する前に、一時的で、はかなく消えてしまう。これは、様々なサイズやスタイルをもち、しかも数や位置が変わっていく「椅子取りゲーム」と似通っている。それは、人間を常に揺動させつづけ、達成を約束せず、いかなる休息もなく、恐怖心を取り除かれてリラックスでき気苦勞もなくなるに相違ない最終目標達成の満足感も何らもたらさない。

悲観的ニュアンスが漂うが、第2ステージではこのプロセスを避けては通れない。「椅子取りゲーム」に勝ちつづけるか、それともこのゲームから降板するか、これは格差問題にもつながる。適切な居場所を確保できる者もいれば、その獲得に早期から失敗する者も必然的に存在する。敗者はその舞

台からは去らなければならない。しかし、異なる舞台に再チャレンジすることはできる。ナンバーワンあるいはラストワンを目指すのではなく、オンリーワンの方向に切り替えればよい。ただし、そのためには自分なりの付加価値をもつことが必要となる。換言すれば、従来の舞台にいつまでも固執するのではなく、心機一転、切り換えるという選択肢もありうる。もちろんその場合、自己責任にはなるが、チャレンジしてみる価値はある。例えば、フィルムカメラに代わってデジタルカメラが主流となった今となっては、使用者が自ら写真の編集やプリントを簡単に行え、フィルム交換の必要もなく連続撮影も容易に行えるデジタル化に抵抗を感じる人は少ないであろう。

Bauman はまた、多様化した現代社会との関与、例えば、様々なコミュニティ間の関与について、次の理由から警鐘を鳴らしている。

...for every new vacancy there are some jobs that have vanished, and there is simply not enough work for everybody. And technological progress — indeed, the rationalizing effort itself — tends to augur ever fewer, not more jobs. (p.161)

...消滅していく仕事があれば、新しい隙間的工作も生まれる。しかし、誰にとっても十分な仕事があるわけではない。事実、合理的成果である技術進歩は、多くの仕事を提供するわけではない。

Globalization appears to be much more successful in adding new vigour to intercommunal enmity and strife than in promoting the peaceful coexistence of communities. (p.192)

グローバル化は、共同体の平和な共存を促進するというよりも、共同体間の憎悪や闘争を新たに刺激するという点において、作用しているように見える。

それゆえに、アイデンティフィケーション、自己革新、そのための生涯教育が必要となるのである。筆者の考える打開策としては、常識を疑い、マンネリズムからの脱却を試みることで、そして、これを忍耐強く継続することに尽きる。また、これ以外に策はない。彼の言説にはペシミズムが漂うが、それで終わるのではなく、突破口は暗示されている。それは、隙間にチャンスがあるかもしれないということであり、私たちがどのようにチャンスを活用するかにかかっている。成功裏に終わるか、失敗に終わるか、それはわからない。しかし、何もしていないでいると、いずれアナクロニズムに陥入し、確実に消滅してしまうだけである。

5. *Culture in a Liquid Modern World* (Polity Press, 2011) から

かつて「国」は、主として生まれ故郷を指す狭い範囲の言葉として用いられることが多かったが、外延的には、藩から県、そして、「国家」にまで拡大した。今後もその範囲を拡大するかもしれない。私たちは、思考し行動するとき、通常これを生活圏の外枠としている。しかし、グローバル化の波は、今や、地球国家のレベルで対応することを要請している。環境、資源、リスク、ビジネス、学問、どれ一つとして一国家のみで解決できる問題ではない。しかし、現実問題として、私たちは地球国家のレベルで、これら諸問題に対峙しているであろうか。これまでも生活圏が拡大するとき、対立・矛盾・反動が混在する不透明な状況に直面してきた経緯がある。現在のグローバル化にはどのように向き合っているであろうか。Bauman のテーマは、ここに集約され、その指針が述べられている。

I use the term 'liquid modernity' here for the currently existing shape of the modern condition, described by other authors as 'postmodernity', 'late modernity', 'second' or 'hyper' modernity. What makes modernity 'liquid', and thus justifies the choice of name, is its self-propelling, self-intensifying, compulsive and obsessive 'modernization', as a result of which, like liquid, none of the consecutive forms of social life is able to maintain its shape for long. (p.11)

他の著者たちは、近代のこうしたあり様を「ポストモダン」、「後期近代」、「第二」モダニティ、「超」モダニティと表現しているが、私は「リキッド・モダニティ」という用語をあてている。モダニティを「リキッド」たらしめているもの、そして名称選択の根拠ともなっているもの、それは、自己起動的で自己増強的、強制的で脅迫的な「近代化」のことで、その結果として、液体のように、一連の社会生活において長くその形状を維持することはありえない。

The principle of cultural elitism is omnivorousness — feeling at home in every cultural milieu, without considering any as a home, let alone the only home. (p.14)

文化的なエリート主義の原則は雑食性であること、すなわち、いかなる文化的環境においても家庭的雰囲気を感じることであり、どのような環境であれ、それが一つの家、あるいは一つしかない家庭だとは考えないことである。

現在の多様性を特徴とする社会や文化では、普遍的で絶対的な基準を見出すことは不可能であり、危険ですらある。一時的、暫定的な基準を設定することは可能であるが、それはあくまで相対的でしかありえない。それでは、こうした時代の生活世界では、人間として、あるいは社会としてどのようなスタンスが必要となるのだろうか。

彼はその対処法として、絶えざる自己再構築、自己革新を提唱する。最終目的地はどこなのか、それは誰にもわからない。しかし、個人的にも社会的にも変革のプロセスなくして存続はない。彼の言説はプロセス重視に帰着し、一時的な安住の地に満足してはいけないと説く。変動する社会での満足は却って慢心を招き、その後の存在を危うくするから、「油断大敵」である。飽和状態の豊かな社会でハングリー精神が必要となる逆説、パーソナル化やグローバル化が産出した多様性がもたらした反目、対立、矛盾、すなわち、予定調和の世界を実現することはもはやかなわない。現代人にとって厳しい状況下ではあるが、さりとして逃避することもできない。この時代に突破策・処方箋はないのであろうか。明言できるとすれば、それは、ことにあたり柔軟に対応するソフトな自己あるいは組織の形成を、日常化、習慣化しつづけることである。そして、結果的に創造性が発揮できることに期待することに尽きるのではないか。

こうしてみると、Bauman の Liquid Modernity 論は、現代社会論であるのみならず、Breakthrough 論として読むこともできる。

そして Bauman の以下の言葉には、私たちへの応援メッセージが含意されていると読みとることもできるのではなからうか。

Unlike in the past, the reality of living in close proximity with strangers seems to be here to stay, and so it demands that skills in daily coexistence with ways of life other than our own must be

worked out or acquired; a coexistence, what is more, which will prove not only bearable but mutually beneficial — not just despite, but because of the differences dividing us. (p.37)

過去とは違い、異邦人とごく近いところで生活するという現実が、これからもつづくことになる。そのためには、これまでの自分たちとは異なるやり方で日常的に共存するスキルが必要となる。その共存とは、単に我慢するだけでなく、お互いに恩恵をもたらすものでなければならない。— 私たちを分ける違いにもかかわらずというのではなく、まさに、その違いゆえの共存である。

6. おわりに

近代の第2ステージ、リキッド・モダニティを Bauman はどのように把握しているのか、その大綱を彼の代表的著作から検討した。パーソナル化は、マクロレベルでもミクロレベルでも進展し、多様化の現象を生んでいる。この第2ステージにおいてこそ、全体と部分、さらに全体と個人との関連性を考察する社会学の真価が問われている。これまでもアノミー論やコミュニケーション不全の考え方が社会学にはあったが、前提として、あるべき正常な姿や目標に対するズレ、偏差としての理解がポイントで、その修正を企図するものであった。しかし、Bauman がテーマとするものは、そのズレの修正ではなく修整といえるものではないかと筆者は考えている。それを経て、さらなる共存あるいは止揚へと視野を拡大する可能性をも模索しているのではなかろうか。この時代を生きる私たちとしては、差異を恐れず、むしろ楽しむぐらいの勇気と寛容さを持ちたい。

Bauman は近著 *What Use is Sociology? Conversations with Michael-Hviid Jacobsen and Keith Tester* (Polity Press, 2014, 伊藤茂訳『社会学の使い方』青土社, 2016年)において、「私たちは自問したり自分たちの行動や生活を疑問視したりする」必要性があると説き、「社会学の目的は人間の選択の幅を広げることです。」(伊藤訳, pp.100-101) と社会学の存在理由を述べているが、社会学にはノーマライゼーションにつながるものがある。

筆者もこの点に注目し、時代の突破策の展開を追いたい。また、日本における第2ステージに特徴的な社会・文化現象も検討することで、Bauman 理論の具体的諸相を確認できると考えているが、これについては稿を改める。

引用文献

Z. Bauman. *Liquid Modernity*. Polity Press, 2000.

(邦訳『リキッド・モダニティ 液状化する社会』森田典正訳, 大月書店, 2001年)

Z. Bauman. *The Individualized Society*. Polity Press, 2001.

(邦訳『個人化社会』澤井敦・菅野博史・鈴木智之訳, 青弓社, 2008年)

Z. Bauman. *Liquid Life*. Polity Press, 2005.

(邦訳『リキッド・ライフ 現代における生の諸相』長谷川啓介訳, 大月書店, 2008年)

Z. Bauman. *44 Letters from the Liquid Modern World*. Polity Press, 2010.

(邦訳『リキッド・モダニティを読みとく』酒井邦秀訳, ちくま学芸文庫, 2014年)

Z. Bauman. *Culture in a Liquid Modern World*. Polity Press, 2011.

(邦訳『リキッド化する世界の文化論』伊藤茂訳, 青土社, 2014年)

Z. Bauman. *What Use is Sociology? Conversations with Michael-Hviid Jacobsen and Keith Tester*. Polity

Press, 2014.

(邦訳『社会学の使い方』伊藤茂訳, 青土社, 2016年)

参考事典

日本社会学会社会学事典刊行委員会『社会学事典』丸善, 2010年

見田宗介 顧問, 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一 編者『現代社会学事典』弘文堂, 2012年

参考資料

E. H. Erikson. *Identity—Youth and Crisis*. Norton, 1968.

(邦訳『アイデンティティ 青年と危機』岩瀬庸理訳, 金沢文庫, 第5刷, 1998年)

R. J. Lifton. *History and Human Survival. Essays on the Young and the Old, Survivors and the Dead, Peace and War, and on Contemporary Psychohistory*. Random House, 1970.

(邦訳『終わりなき現代史の課題』小野泰博・吉松和哉訳, 誠信書房, 1974年)

R. J. Lifton. *Boundaries, Psychological Man in Revolution*. Random House, 1970.

(邦訳『誰が生き残るか プロテウスの人間』外林大作訳, 誠信書房, 1971年)

(にしわき かずひこ 総合教育センター)